

「人を見る目」の世代間比較

発表のポイント

- ◆ 顔から他者の信頼性を判断する際の正確性とバイアスを、高齢者と若年者で比較しました。
- ◆ 判断の正確性は全体として低いものの、高齢者の方が相対的に高いか、若年者と同程度でした。一方、若年者では「信頼できない」と判断しやすいバイアスが一貫して見られました。
- ◆ これらの結果は、高齢者は第一印象で他者を信頼しすぎるというステレオタイプの見解が妥当でないことを示しています。



ChatGPT-5 で生成した「信頼できない印象を与える男性の顔」と「信頼できる印象を与える男性の顔」

これらの画像は、実際に信頼できない／できる男性の顔を示すものではなく、人々が信頼性について抱くステレオタイプの顔イメージを視覚化した例です。

概要

東京大学大学院人文社会系研究科の鈴木敦命准教授、帝京大学文学部心理学科の石川健太講師、専修大学大学院文学研究科の大久保街亜教授の研究グループは、日本人とイギリス人を対象とした心理学実験を通じて、「人を見る目」の世代間差を明らかにしました。

人には、他者がどの程度信頼できるかを顔から判断する傾向があります。本研究では、こうした「顔による信頼性判断」の世代間差を検討するため、ゲームでどの程度協力的に振る舞ったかや、汚職による有罪歴の有無がわかっている男性の顔画像を用い、若年者と高齢者の間で信頼性判断を比較する実験を行いました。その結果、非協力的な人や汚職歴のある人とそうでない人を識別する正確性は、全体として低いものの（正答率（注1）平均 55%前後）、相対的には高齢者の方が高いか、世代間で差がないことが示されました。また、「信頼できない」と判断しやすいバイアス（注2）が若年者で一貫して認められました。これらの結果は、高齢者は第一印象で他者を信頼しすぎるというステレオタイプの通説に疑義を投げかけるものです。

発表内容

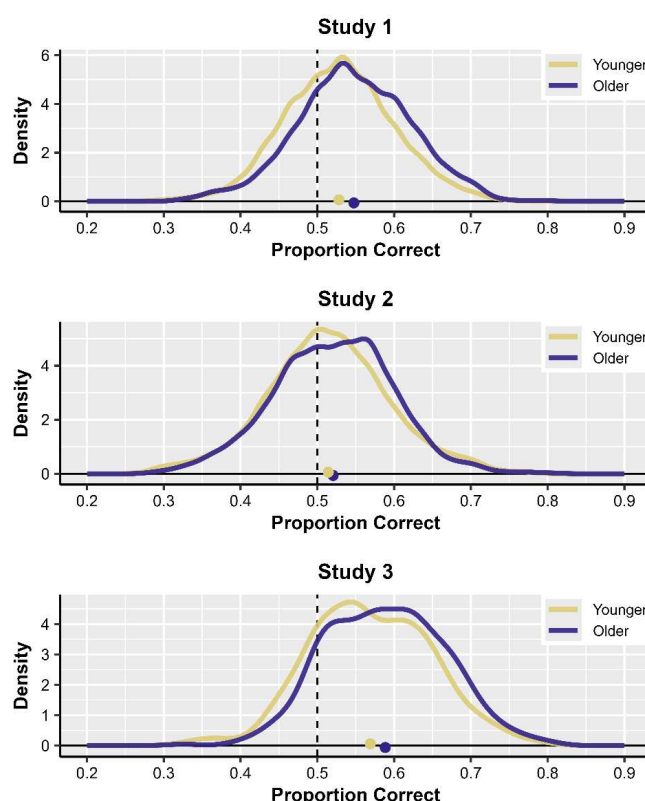
顔による信頼性判断については、加齢とともに他者を信頼しすぎるバイアスが強まり、それが高齢者の詐欺被害リスクを高めている可能性が指摘されてきました。しかし、この主張を直接裏付ける科学的根拠はこれまで乏しいのが現状でした。そこで、本研究では、若年者（18～30歳）と高齢者（65～80歳）の間に顔による信頼性判断の正確性とバイアスを比較する3つの実験を行いました（一部の実験では、40～55歳の中年者も対象としました）。

実験1・2では、日本人の参加者に多数の若年男性の顔画像を見せて、各男性が信頼できるかどうかを答えてもらいました。顔画像の男性は、過去に経済的ゲームに参加し、相手に協力し

て中程度の報酬を平等に得るか、協力せずに自分だけ大きな報酬を得るかを繰り返し選択していました。今回の実験では、そのゲームで協力的だった男性と非協力的だった男性の顔を信頼性判断の対象としました。なお、実験1は真顔の画像のみを用いたのに対し、実験2は真顔と笑顔の画像を用いて表情の影響を調べるなどの違いがありました。結果として、非協力的な男性を協力的な男性よりも信頼できないと判断する正確性は、実験1では高齢者の方が若年者よりも高く、実験2では両者で同程度でした。また、どちらの実験でも、「信頼できない」という判断がなされやすい「ネガティビティ・バイアス」が全般的に認められ、実験1ではこの傾向が若年者で強いことが示されました。また、実験2では、笑顔の画像を用いた場合、高齢者・若年者のいずれにおいてもネガティビティ・バイアスが弱まることも示されました。

実験3では、イギリス人を参加者として、アメリカ合衆国の中老年男性政治家の顔画像を判断対象としました。顔画像の政治家の半数は汚職で有罪になった記録があり、残りの半数にはそうした記録はありませんでした。結果として、汚職歴のある政治家とない政治家を識別する正確性は高齢者の方が若年者よりも高く、汚職歴の有無によらず顔画像の人物を信頼できないと判断しやすいネガティビティ・バイアスが若年者で認められました。

高齢者であれ若年者であれ、顔から他者の信頼性を判断することは難しいです（本研究での平均正答率は55%前後でした）。ただし、本研究の結果から、高齢者が他者の信頼性を顔から過剰に肯定的に見積もっているというステレオタイプの通説は妥当ではないと考えられます。こうした通説の背景には、中立的な科学的知見を、若年期を基準に「高齢期に問題が生じる」と解釈しやすい、私たちの無意識的なバイアスが関係しているのかもしれません。



図：顔による信頼性判断の正確性（正答率 [Proportion Correct]）の密度分布

それぞれの実験（Study 1～Study 3）について、若年者（Younger）と高齢者（Older）に分けて図示されています。各グラフ下部の●は平均正答率を表します。「信頼できる／できない」の二択課題であったため、当てずっぽうで答えても、統計的には平均正答率0.5を達成できます。

発表者・研究者等情報

東京大学
大学院人文社会系研究科
鈴木 敦命 准教授

帝京大学
文学部心理学科
石川 健太 講師

専修大学
大学院文学研究科
大久保 街亜 教授

論文情報

雑誌名 : *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*

題 名 : Neither inaccurate nor biased in later life: Age-related differences in the accuracy and bias of facial trustworthiness judgment

著者名 : Atsunobu Suzuki, Kenta Ishikawa, and Matia Okubo

研究助成

本研究は、科研費「直感的信頼の高齢者優位性—国や実験課題・分析法を越えた頑健性に関する検討（課題番号：23H03878）」、「直感的信頼の成人期発達—課題有意義性と印象操作の影響を考慮した三世代間横断研究（課題番号：21H05323）」の支援により実施されました。

用語解説

（注1）正答率：経済的ゲームで非協力的だった男性や汚職歴のある政治家を「信頼できない」と判断した回数、および協力的だった男性や汚職歴のない政治家を「信頼できる」と判断した回数の合計を、全判断回数で割って得られた値を指します。ここでは便宜上、この割合を「正答率」と呼んでいます。発表内容に記載されている研究方法の詳細もご参照ください。過去の研究でも同様の分析方法が用いられていますが、経済的ゲームでの行動や汚職歴に基づいて人物を「信頼できる／できない」と分類するというやり方は、単純化されたものである点にご留意ください。

（注2）バイアス：偏り。ここでは、顔による信頼性判断において、顔画像の人物を「信頼できる」と判断しやすい偏り（ポジティビティ・バイアス）、または「信頼できない」と判断しやすい偏り（ネガティビティ・バイアス）を指します。例えば、「顔による信頼性判断では、高齢者の方が若年者よりも『信頼できる』と判断しやすい」という結果が得られた場合、それは高齢者のポジティビティ・バイアス、若年者のネガティビティ・バイアス、あるいはその両方として解釈することができます。ただし、従来の研究では、高齢者のポジティビティ・バイアスという見方が主に採られてきました。

問合せ先

<研究内容について>

東京大学 大学院人文社会系研究科

准教授 鈴木 敦命 (すずき あつのぶ)

Tel : 03-5841-3861 E-mail : atsuzuki@l.u-tokyo.ac.jp

<機関窓口>

東京大学 大学院人文社会系研究科 総務チーム

Tel : 03-5841-3705 E-mail : shomu@l.u-tokyo.ac.jp